

割れ窓運動実践

府民生活部安心・安全まちづくり推進課

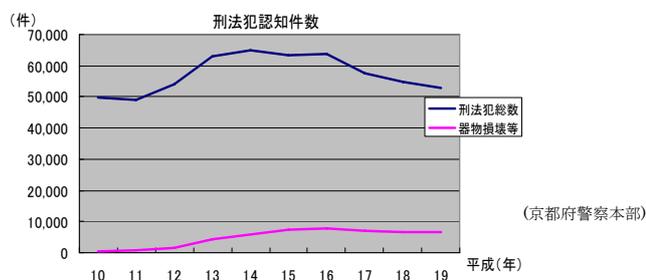
【概要】

- 1枚の割られた窓ガラスをそのままにしていると、さらに割られる窓ガラスが増え、いずれ街全体が荒廃してしまうという、アメリカの犯罪学者ジョージ・ケリング博士が提唱した「割れ窓理論」。かつて、犯罪多発都市ニューヨーク市で、1994年以降、当時のジュリアーニ市長が、この「割れ窓理論」を実践。割られた窓の修理や落書きなどの消去とともに、これら軽微な犯罪の取締りを強化した結果、犯罪が大幅に減少したと言われています。
- この「割れ窓理論」に基づき、シャッターや壁に書かれた落書きや張り紙など小さな犯罪の芽を消去・除去することにより大きな犯罪の芽を摘み取る活動を、地域住民やボランティア団体と府職員のボランティア「京都府庁落書きバスターズ」との協働により実施しています。
- 事業の実施に際しては、ボランティア参加等人的支援のほか、ペンキや消去剤等の資機材の支援、落書き建造物の所有者への説明、広報等を協働で行っています。
- 平成20年度は、計10回実施、府職員ボランティアだけでなく、一般ボランティアとも参加者数が増加傾向にあり、事業実施時には府民からお礼の声をかけていただくなど、府民の関心は高まりつつあると思われます。

背景

◇依然高い犯罪発生状況

刑法犯認知件数は平成14年をピークに減少傾向にありますが、平成19年時点で人口10万人当たり大阪府に次いで第2位と依然高い水準にあります。中でも落書きを含む「器物損壊罪」は、平成16年をピークにほぼ横ばい状態にあるものの、10年前と比較すると約1.5倍に増えています。



◇アクションプランにおいて提言

このような中、「より地域に密着した持続可能な防犯活動と、身近な場所で防犯意識を

醸成していけるような仕組みの一つとして、この「割れ窓理論の実践」が有効ではないか」と、平成19年12月に策定されたアクションプラン「防犯まちづくり推進プラン（地域防犯力アップ作戦）」において提言され、実行することになったのです。

目的

「地域で小さな犯罪の芽を摘み、安全なまちをつくる」

- ◇地域の人たち自らが主体となって、犯罪のない安心・安全なまちをつくることを目指します。
- ◇落書きなど小さな犯罪の芽を摘み取っていくことにより、大きな犯罪の抑止につなげていきます。

取組

◇落書き消しの対象の確定

自治会や商店街など、地域から「防犯の観点から落書きを消したい」という声が上がると、まず、落書き消しを行う対象箇所を特定します。シャッターや電柱、壁など、対象物は様々です。

◇資機材の準備

落書きを消す作業には、大きく分けて、消去剤により「消す」場合と、ペンキ等により「塗る」場合とがあります。下地の素材や色等を見ながら適切な方法を判断し、それにふさわしい資機材を準備します。1活動当たり10万円程度を上限に資材等の支援を行っています。

◇落書き対象物所有者への事前説明

落書きといえども所有者がいるため、消したり塗ったりする際には、事前に承諾をもらわなければいけません。ボランティア団体等と一緒に承諾をもらいに行きます。

かつて、ボランティア団体が自分たちだけで承諾をもらいに行っていた際には、「この活動はボランティアなので、落書きを消してお金をいただくというものではありません。」というところから説明をし、理解していただくのに苦労されていたそうですが、府と一緒に説明に行くことによりと所有者から承諾を得やすくなったと喜んでもらっています。「京都府」の信用度を実感するとともに、ボランティアで活動されてきた人の苦労を改めて肌で感じる事ができ、よい経験になっています。

◇府民ボランティア募集等の広報

当初はボランティア団体の活動に「後援」という形でスタートしましたが、作業規模が大きい場合、府の様々な媒体を活用して、実施案内や府民ボランティア募集等の

広報を行うなど、支援の方法も変わってきています。

団体名が主催団体として広報媒体に掲載されることで、ボランティア団体の認知度の向上し、マスコミから取材を受けることにより、さらなる「やる気」の向上へつながっています。

◇「支援」から「共に活動」～府職員のボランティアとしての参画～

「職員通信」や「庁内掲示板」を活用して、全ての府職員へボランティア参加を呼びかけています。このことは、広報や一緒に説明に行くといった事業面での「協働」から一歩進んで、府職員のボランティア活動に対する参画意欲の向上の喚起につながっています。



8月1日（第1回）：
寺町京極商店街



10月4日：
京都駅周辺、京都南ロータリークラブと



11月25日：錦市場商店街、知事初参加

効果

◇活発化する「割れ窓理論」実践運動

10月12日には、舞鶴市内で地元防犯推進委員などとの協働活動を実施するなど、活動範囲が広がってきています。



舞鶴市堂奥地内での作業風景

→



こんなにきれいになりました。

職員ボランティアも毎回新たな参加者を迎え、平成20年度は計10回、延べ474人、うち府職員参加者168人の参加となりました。特に、府職員は、本庁だけでなく、府立大学や府立病院を含む各公所から参加があり、ボランティア意識の高い職員が随所におられることを心強く感じています。

(ボランティア参加者の声)

- ・ 通行人からお礼をもらう機会が増えてきて嬉しい。
- ・ 落書きを消したり、張り紙をはがすことが、こんなに気持ちがいいとは！
- ・ 道を歩いていると、これまで気にならなかった落書きが気になるようになった。

また、様々な部署から参加いただき、役職の区別なく、一緒になって同じ作業をすることにより、日常の仕事だけでは知り合うことがなかった人との新たなつながりができてきたと感じています。

◇「京都府庁落書きマスターズ」の結成

それまでの活動をさらにパワーアップするため、職員ボランティアによる「京都府庁落書きマスターズ」を1月に結成しました。



「京都府庁落書きマスターズ」の特徴

- ・ 活動毎にチーム編成
- ・ 隊長は府民生活部長
- ・ 活動時に周りから活動がわかるように、「京都府庁落書きマスターズ」ののぼりを掲出し、腕章や帽子を着用
- ・ 府職員に通勤途上や自宅周辺の落書き情報提供を呼びかけ

平成 21 年 1 月 25 日（日）京都市中心市街地（烏丸通～河原町通、四条通～五条通）が初出動、知事にも御参加いただき、好天にも恵まれ、気持ちよく新たなスタートを切ることができました。



現 在

◇平成 21 年度も引き続き

今年度も引き続き、地域住民の方々とともに、地域の落書きを消していくこととして
います。

特に、7 月 10 日から 10 日間の府民防犯旬間には、府内の各地で重点的に実施するこ
とを検討しています。

振り返りと今後の課題

◇主役は地域住民

活動の主体は、あくまで自治会や商店街、PTA などの地域住民です。地域自らが主体
となって落書きを排除し、地域の人々の安全なまちづくりへの関心を高め、実践してい
くことが犯罪が発生しない安全なまちへ、そして元気な地域へとつながっていくのです。

そのためにも、この「割れ窓理論」を府域全体に広めるとともに、地域からの声を汲
み取っていく仕組みづくりが今後の課題です。



子どもたちやその保護者が自分たちの住むまちをきれいにします。

◇京都市以外の地域での取組推進

これまで、京都市内での取組が中心でしたが、今後京都市以外の地域で実施希望の声が上がってくれば、広域振興局毎のネットワークを活用した実施を検討していきます。

◇「府民協働防犯ステーション」を活動拠点へ

現在交番・駐在所を核として設置を進めている「府民協働防犯ステーション」を活動拠点として、地域の防犯活動のひとつとして「割れ窓理論」実践運動を進めていけるような仕組みを作っていくことが、将来的な課題です。

企画総務課コメント

「割れ窓理論」はニューヨークにおいて軽微な犯罪の抑止効果が認められたもので、アクションプラン検討会議の中での提案が実現したものです。

事業の支援も多様性が増しています。従来は補助金、助成金など「お金を出して支援する」やり方が中心でした。この事業ではボランティア団体の「後援」をすることで事業が進めやすくなるなど、普段私たちがあまり意識していない京都府という組織の「信用」を大切に、活かしていくという側面が意識されています。

また、ボランティア募集についても「府職員もボランティアに参加してみれば？」という発想から「職員通信」「庁内掲示板」を通しての呼びかけに大きな反響があり、「協働」から一歩進んで「参画」へと活動に広がりが出てきました。様々な部署からの参加は役職に関わりなく一緒に作業することで新たなつながりができ、充実感、満足感も高まっています。

当事者のニーズを踏まえた「多様な」支援手法を実現している好事例といえるでしょう。